

足羽川ダム建設事業におけるインフラツーリズムの取り組みについて

前田 祐希¹・大石 直輝²

¹近畿地方整備局 福井河川国道事務所 総務課 (〒918-8015福井県福井市花堂南2-14-7)

²近畿地方整備局 足羽川ダム工事事務所 工事課 (〒918-8239福井県福井市成和1-2111)

足羽川ダムは、足羽川、日野川及び九頭竜川の下流域における洪水被害の軽減を目的として建設が進められている洪水調節専用の流水型ダムであり、完成すれば日本最大級の流水型ダムとなる。昨今、インフラ施設を観光するインフラツーリズムが注目を集めており、足羽川ダムもその一つになることが十分に期待される。また、建設途中の現在においても、工事現場（現場見学会）への来訪者数が増加傾向にある。本論文では、ダム完成後の持続的なインフラツアーの展開を目標とし、事務所横断的に広報プロジェクトチーム（以下、広報PT）を編成して取り組んでいる活動及びそれに関連する取り組み内容を事例として紹介する。

キーワード 流水型ダム、インフラツーリズム、地域活性化

1. 足羽川ダム建設事業について

足羽川ダムは、九頭竜川水系足羽川の支川部子川（福井県今立郡池田町小畑地先）に建設する高さ96m、総貯水容量28,700千 m^3 、有効貯水容量（洪水調節容量）28,200千 m^3 の重量式コンクリートダムである。（図-1及び図-2）

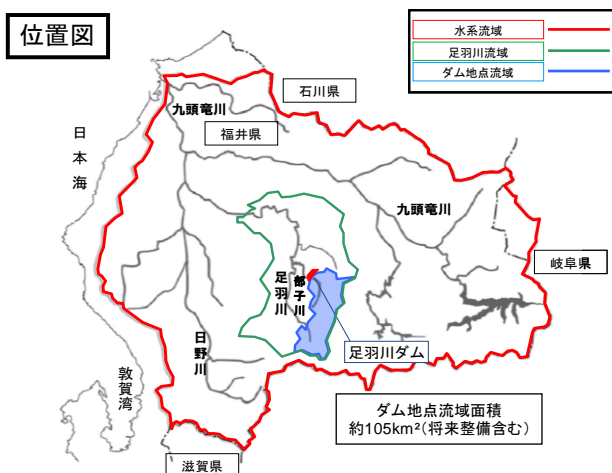


図-1 足羽川ダム位置図

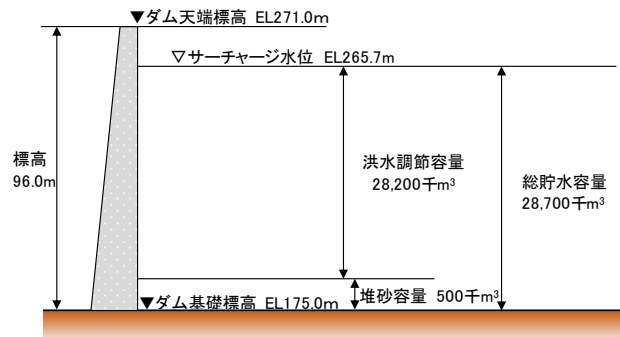


図-2 足羽川ダム貯水池容量配分図

足羽川ダム建設事業（第Ⅰ期事業）は、足羽川ダム本体及び水海川導水施設（分水堰・導水トンネル）を河川整備計画期間内に整備する計画である。また、将来整備（第Ⅱ期事業）として、足羽川、割谷川及び赤谷川からなる導水施設を整備する計画である（図-3）。

現在供用中の流水型ダムには、辰巳ダム（石川県）、益田川ダム（島根県）などがあるが、いずれも堤高50m程度であり、足羽川ダムが完成すればこれらを上回る国内最大級の流水型ダムとなる。足羽川ダムの完成イメージを図-4に示す。

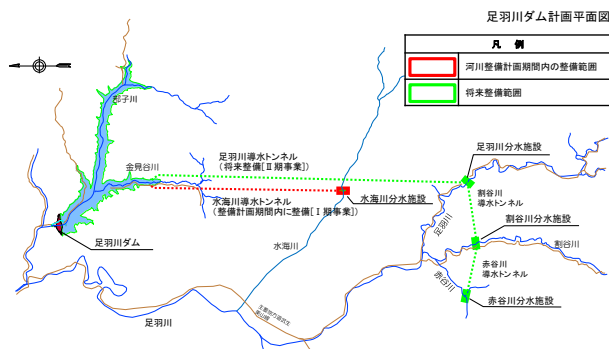


図3 足羽川ダム計画平面図



図4 足羽川ダム完成イメージ

2. ダムを活用したインフラツーリズム

近年、ダム、港、歴史的な施設等、インフラ施設を観光するインフラツーリズムが注目され始めている。国土交通省では、2016年からインフラツーリズムを紹介するポータルサイトを¹⁾設け、広く情報発信している。インフラツーリズムの魅力は、巨大な構造物のダイナミックな景観を楽しんだり、インフラ施設の役割や背景を学ぶことである。ポータルサイトには多数のダムが掲載されており、普段は見るることができないダムの堤体内などを見学できることから、ダムはインフラツーリズムにおける代表的かつ魅力的な施設となっている。

また、ダムとその周辺地域の環境を活用し、地域と連携してダムを観光資源として活用するようなダムツーリズムというものもある。国土交通省では、民間ツアー会社と連携してダムツアーを実施しており、ダムとその周辺地域の環境を活用し、地域と連携してダムの観光資源としての活用を図っている。加えて、建設途中のダムの工事現場を活用して、完成前から観光資源としての効用を発現できるようダムツーリズムを推進している。

足羽川ダム工事事務所においても、建設途中の足羽川ダムの工事現場を見学する、現場見学会を行っている。また、将来的には地域と連携して足羽川ダムを観光資源のひとつとして、活用できないか検討中である。

3. 足羽川ダム工事事務所における広報活動

当事務所では、足羽川ダムとは何か、どのような役割があるのかを知っていただくために、広報PTが中心となり、その中でも若手職員主体でアイデアを出し、オブザーバーとして足羽川ダム本体建設（第1期）工事の施工業者である清水・大林特定JVの若手職員を加えて活動を行っている。広報活動として行ってきた取組みの事例を以下で紹介する。

(1) 足羽川ダム現場見学会

工事状況の進捗度合いにより、見学時の風景が変化するため「今だけ」「今しか見られない」をキャッチフレーズとして、足羽川ダム現場見学会を実施している。なお、ただ見学するだけではなく、建設に至る背景やダムの機能・役割なども紹介しながら、同時に土木事業の学習もできるように工夫しながら行っている。

本見学会の最大の魅力は、ダム工事だけでなく、道路を高い位置に付替えるための橋梁工事や他の河川から水を導水するための導水トンネル工事の見学もコースに入っており、一度に様々な工事を見学できることである。日常生活では建設中のダムや大規模な工事を見る機会が少ないため、記憶に残る体験学習をすることができる。

また、令和2年度は例年とは違い新型コロナウイルス感染症の拡大が収束していない状況においての見学会であったため、感染予防対策（検温やアルコール消毒、説明者のフェイスシールド着用、参加者のマスク着用、参加人数の制限など）を実施した上で開催した。見学会の開催前にはアテンド研修(写真-1)を実施し、広報の専門家から感染予防対策を踏まえた説明の仕方や見送りの大切さなどを学び、各人の説明の力の向上を図った。研修を踏まえ、来場者には安心して見学していただけるようコロナ対策の説明パネル(写真-2)を用いて感染予防対策の説明を行い見学会を実施した。

さらに、広報PTを中心に見学会を充実させるための様々なアイデアを出して、工夫を凝らした見学会を行っている。その一つがダムカードをもとにしたダムカードフレームを用いて、ダムの建設地などを背景に世界に一つだけのダムカードが撮影できるようにしたものである(写真-3)。撮影された写真はSNSへの投稿もあり、これらが拡散されることで、見学会に来場される人が増えることを期待している。他にも、橋梁（コンクリート）の強さが体験できるものを用意しており、今後も様々な体験ができるものを準備して行く予定である。

令和2年度の来場者数は令和元年度（平成31年度）よりも、新型コロナウイルス感染症の影響により減少したが、平成30年度からの令和2年度の来場者数は約2倍増加しており、令和3年度5月末時点においては、8月までの予約で過去最高の約353名となっている(表-1)。この結果は、過年度より取り組んできた成果と考えられる。

実際に、観光バス事業者の方からは「足羽川ダム現場見学会は非常に人気がありツアーを行ってほしいとの要望を受けている。」と伺っている。今後もこの期待に応えられるよう、事務所一丸となって充実した見学会を開催していく。



写真1 アテンド研修に参加している職員の様子

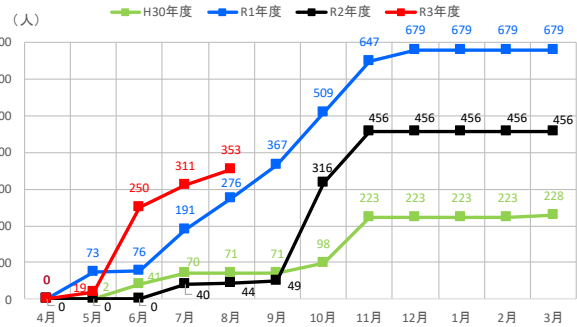


写真2 コロナ対策の説明パネルを用いた説明状況



写真3 ダムカードフレームでの記念撮影状況

表-1 足羽川ダム来場者（一般）のグラフ



(2) 足羽川ダム ニュースレター

足羽川ダムニュースレター(写真4)とは、工事の流れや進捗状況、イベント実施時の内容(式典や池田町民限定の現場見学会)について、情報発信しているものである。ニュースレターは年3回程度発刊し、池田町役場やまちの市場「こってコテいけだ」などで配布して、足羽川ダムを詳しく知らない方に知ってもらうひとつのツールとして取り組んでいる。令和2年度は、合計3号を(26号~28号)発刊しており、今後は池田町の枠を超えて下流域の福井市や坂井市などでも配布できれば、より多くの方に興味を持っていただき、見学会への参加が見込められると考える。



写真4 ニュースレター27号

(3) 動画を活用した広報活動

YouTubeに公式チャンネルChannel Asuwagawaを2017年から設けており、定期的に3~4分の動画を投稿している。令和2年度は、水海川導水トンネル2期工事を少しでも知ってもらえるよう、施工業者の(株)安藤・間や事務所の職員にインタビューを実施した。内容は施工方法や岩判定などについてで、普段は関係者以外立ち入ることができない工事現場の状況を動画を通して見ることで、工事現場で行われている仕事を少しでも一般の方には知っていただけるよう、YouTubeを積極的に活用している。そのほか、令和2年11月15日に開催した、足羽川ダム本体建設工事起工式の様子などもアップしている。今後は、

ドローンを用いた空撮や本格化するダム本体工事の状況(タイムラプスなど)をアップする予定である。

(4) 水源地域との連携

令和2年10月に足羽川ダム本体建設工事起工式前のイベントとして、水源地域の地元池田町と連携し、池田町民限定の現場見学会を実施した。イベントでは「今だけ」「あなただけ」という特別感を演出し、参加者で人文字「足羽川ダム」を作り、ドローン撮影して記念写真を進呈するなど(写真-5)、普段は見られない、ダム建設予定地を見下ろす景色を楽しむことができ、迫力ある風景を見ることができたと好評であった。また、工事期間中だけ部子川の水を迂回させる仮排水トンネル内をライトアップして、その中を歩く「今しか見られない」空間を創出した(写真-6)。内部にはダム建設で移転いただいた地区の昔の写真を展示し、下流域の洪水被害を防ぐために、苦渋の決断をされた方々がいることを知っていただけたと考える。さらに、トンネル吐口(出口)には一言メッセージスペースを設置し、参加者にメッセージを自由に書いていただき、「みんなのいのちを守るダム」「工事がんばって下さい」など多数のメッセージをいただいた(写真-7)。イベント終了後はトンネルに部子川が流れ、トンネル内に入ることができないため、最初で最後の貴重な見学会となった。



写真5 イベント時のドローン撮影



写真6 イベント時の仮排水トンネルライトアップ

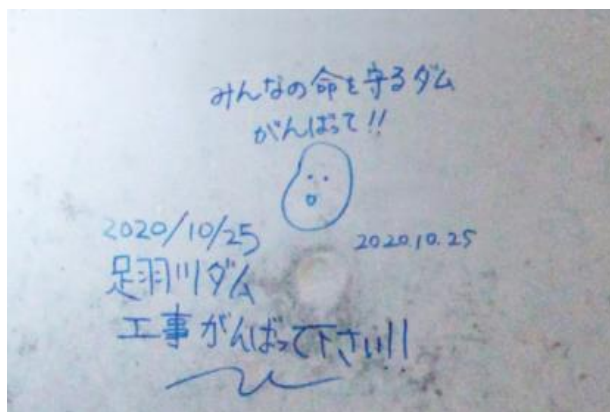


写真7 イベント時にいただいたメッセージ

そのほか、地元池田町出身のデザイナーの方と協力して、足羽川ダムに愛着をもってもらうための足羽川ダムロゴマークのデザイン案を複数作成した。事務所内で3つのロゴマーク案まで選定し、最終決定は令和2年度の足羽川ダム現場見学会に参加された総勢326名の方に投票いただき、最多得票で決定した。デザインコンセプトは「山」、「水」、「羽」で、足羽川(Asuwagawa)のAをつくっており、Aのてっぺんは冠山、羽の付け根が開いているのは流水型ダムをイメージしている(写真-8)。事務所だけではなく、池田町の方が作成したデザインにしたことや現場見学会の参加者の投票にしたことは、足羽川ダムを身近に感じることでできる良い機会となり、令和8年度のダム完成に向けて、今後もより一層、地元の方々の理解を深めていくべきだと考える。



写真8 足羽川ダムロゴマーク

4. まとめ

(1) 今後の展望

より多くの方に池田町や足羽川ダムを知ってもらうためには、新型コロナウイルス感染症対策及び安全対策を実施した上で引き続き、現場見学会を開催していく必要がある。また、イベントなど一過性のものとするのではなく、継続して実施できる企画を用意して池田町や足羽川ダムのPRを実施すれば、来場者も増加し、池田町の地域活性化にも寄与できると考える。そのためには、ニ

ユーチューブやYouTubeなどを利用して、広く情報を発信できるよう広報活動に力を入れていく必要がある。

コロナ禍で県外へ出かける機会が減っている時期だからこそ、例えば、池田町内の各施設と連携して見学会の企画を考案し、福井県内の修学旅行生を受け入れてみるといったように、状況の変化とともに見学会の開催方法(受入方)も変えることができれば、若い世代にも池田町の魅力や足羽川ダムの必要性ないしは土木事業の重要性を知り・学ぶ良い機会になると考える。

さらに、足羽川ダム完成後は流水型ダムの特徴である「平常時には水をためない」という特徴を活かして、ダム壁面でのボルダリングが実施できれば、観光資源が創出され、更なる池田町の魅力向上に繋がると考える。実際に、高知県の横瀬川ダムではダム壁面を活用した、クライミング施設の横瀬川ダムクライミングウォール^{2,3)}がある(写真-9)。平常時はダムを観光資源として積極的に利用することで地域活性化に寄与し、洪水時はダム本来の利用ができれば足羽川ダムの有効活用に繋がる。

加えて、前述した池田町内の各施設や日本の滝百選に選ばれている龍双ヶ滝などと組み合わせたダムツーリズムができれば、さらに注目を集めることができるかもしれない。池田町、福井県、観光協会などと協働し、ダム活用の仕組みを今後検討していくことが、次のステップに繋がると考える。



写真9 横瀬川ダムクライミングウォール³⁾

(2) 今後の課題

現場見学会の来場者数が増加していることは池田町の地域振興及び足羽川ダムを身近に感じていただくきっかけとして喜ばしいことではあるが、一方で、足羽川ダムでは自動車の駐車スペースが狭いという課題がある。そのほか、自動車がないと建設現場に行けないため、見学会には参加したいが、現実的には難しいといった要望もあった。

今後、来場者が増加している中で、ダムの魅力を発信していくのと同時に、駐車場やトイレといった受入環境の整備も検討していく必要がある。また、足羽川ダムの認知度をさらに高めるために、情報発信も継続・拡充する必要がある。

参考文献

1)インフラツーリズムポータルサイト

<https://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/region/infratourism/>

2)渡川ダム統合管理事務所ウェブサイト

<http://www.skr.mlit.go.jp/watarigawadam/index.html?20140711100001>

3)宿毛市ウェブサイト

<https://www.city.sukumo.kochi.jp/docs-18/18068.html>